

岩波の月刊誌『世界』の5月号は、「沖縄からの声」を3本掲載している。①鳥取県知事を2期8年務めた片山善博氏と現沖縄県知事の玉城デニー氏の対談、「それでも沖縄は声をあげ続ける」、②「沖縄（シマ）という窓」の執筆者の一人であった親川志奈子の「沖縄から先住民族の権利を求めて」、③ノースカロライナ大学の人類学専攻博士課程の榎本空氏の「島（伊江島）に帰る」の3本である。『世界』の編集者は、沖縄からの声を掲載し、日本国民全体の問題であると訴えているのであろう。その姿勢に敬意を表したい。

③榎本氏は、島（伊江島）に帰り、そこでの出会いと体験を踏まえ、伊江島は、戦争中は戦火を浴び、戦後は植民地支配という構造下に置かれた歴史を書いている。その中で、『命こそ宝 沖縄反戦の心』を著した阿波根昌鴻氏を中心に平和を求め、土地の返還闘争など、伊江島の人々の平和への思いと闘いを報告している。私は、教会の青年会でツアーを組み沖縄旅行をした後、一人残って、伊江島を訪ねた。阿波根氏が建てた「反戦平和資料館」を見た。沖縄戦と基地被害の証拠品がところ狭しと、雑多に並べられていた。使用済の武器と模擬爆弾の陳列に恐怖を増幅させられた。そこで、本土から来た日本基督教団の牧師一行とばったり出会い、彼らが計画していた阿波根氏の講演を聴く機会に恵まれた。1時間半を超す講演は力強いもので圧倒された。闘いは、手を肩より上には上げないという徹底した非暴力を貫いたと話されたことが深く印象に残った。伊江島の海でシュノーケルを使って珊瑚礁に群がる魚を見たが、本当に綺麗で、忘れられない光景である。

②親川氏は、2007年に採択された「先住民の権利に関する国際連合宣言」を読んだ時、鳥肌がたったと言う。「宣言」は、植民地主義により権利を奪われてきた人々のために書かれたもので、平和的生存権が保障されてこなかった人々、言語や歴史を再活性化し次世代に継承する権利を奪われてきた人々、土地・領土・および資源を伝統的な方法で所有する権利を奪われてきた人々、また合意のない有害物質の廃棄や軍事行動により命が脅かされていた人々が人権を回復するための理論的枠組みである。2008年、国連の自由権規約委員会は日本に対し、「アイヌの人々および琉球・沖縄の人々を先住民と認め、文化遺産及び伝統的生活様式を保護し彼らの土地の権利を認めるべきだ」と勧告した。アイヌは2008年先住民族として、国会決議された。沖縄は日本民族と異なる特徴を有しているとは考えられないと、国連勧告を無視したままである。親川氏は、沖縄は先住民であり、「宣言」で謳われた諸々の権利の回復と命の尊厳を保障することができれば、どんなに嬉しいかと鳥肌がたったのであろう。捨て置かれた沖縄に住む人の思いを理解できる。

①片山氏と玉城氏の対談は、地方自治に関することから始まっている。片山氏の「いま自治と真剣に向き合っているのは、都道府県だと沖縄県ぐらいしかないのではないかというのが私の率直な感想です」と、玉城氏らの苦闘を評価している。玉城氏は、地方自治の「自主・自立」、いわゆる自己決定権に基づいた判断は、住民自治に一番近い責任者が行なうべきことは地方自治の重要な点だと述べている。辺野古新基地建設は、反対する沖縄の自治権は顧みられず、国の代執行で強行され、構造的な差別を生んでいる。玉城氏は下記のように言う。沖縄だからこそアジア・太平洋地域の平和や発展に貢献できる方向で展開したい。地政的に軍事的な緊張感の高い地域であるが、逆に、文化的、経済的交流を進め、地域の安定と平和の礎になるように発信していきたい。基地問題に抗いながらも、沖縄県民に伝えられてきた「心」「助け合い」「皆きょうだい」という温かみをもって、互いが発展していく方向で、沖縄の地方自治を展開したい。理性と希望を持つ人の発言ではないか。